

Contents

- 松山大学図書館「今昔物語」
— 神森 智学長へインタビュー — P2
- 図書館今昔ピックアップ P4
- 私の図書館利用法 人文学部社会学科4年 関 尚子 P5
- 私が薦めるこの一冊 経済学部講師 吉田健三 P6
法学部助教授 内海淳一 P7
- 第4回松山大学図書館書評賞受賞者 P8



神森 智学長

学生インタビュアー
坂本祐子（法学部4年）
藤井 恵（経営学部4年）

松山大学図書館「今昔物語」 —神森 智学長へインタビュー—

松山大学が1923（大正12年）年創立から80周年を経て、同じく歴史を歩んで来た図書館も今年度（2004年）4月に新図書館システムを導入し、新たな出発ができました。

そこで、今回は「松山大学図書館今昔物語」として、過去・現在・未来を垣間見てみようと思いました。神森 智学長へ現在の本学学生（図書館夜間学生アルバイト）が図書館についてインタビューしました。

Q 学長の学生時代の図書館について

A 残念ながら現在、建物としては残っていない。創立当初（1923年）は、校舎の一部屋を図書室として使用していたようだ。校舎は松山で初めての鉄筋コンクリートの建物だったが、その校舎ができるまでは、北予中学（現在の松山北高等学校）の校舎の一部を借りて授業をしていた経緯もある。昭和3年（1928年）に校舎に継ぎ足したかたちで講堂を建築したが、その1階が図書館で2階・3階が講堂だった。その1階に閲覧室、書庫、事務室があり、職員が2人いた。

昭和24年（1949年）大学になった時、この建物の1階が全部書庫となり、2階は閲覧室、その東側に隣接する部屋が図書館事務室となった。

その後、昭和34年（1959年）に現在の総合研究所の資料庫を書庫として、今の東本館と本館にまたがる2階建の図書館ができ、その2階に閲覧室、1階に事務室があった。

そして、昭和51年（1976年）に50周年記念館として、2階建ての図書館を建設し、平成8年（1996年）に増築して現在の図書館になった。

Q 当時の利用はどのようにしていたのですか

A 当時はすべて閉架で貸出や閲覧希望の際には、閲覧申込書に記入して職員が書庫から図書を出し

て来てくれた。今のように本を直接手に取ることができる開架システムはなかった。閲覧や貸出希望の本を探すのは、カードで探していた。著者別、タイトル別、分類別の3種のカードがあってそれで探していた。

Q 当時の図書館を利用していたエピソードがあれば

A 私が学生時代の図書館は、戦争中（第二次世界大戦）であり、印象に残っているのは、マルキシズムの本が貸出禁止になっていたこと。当時、マルキシズムは危険思想と見られていたからだが、それだけでなく、リベリズムもまた危険思想だった。

秦の始皇帝やナチスによる本を焼き払う歴史があるが、日本はそこまではしなかったが、治安維持法によって思想統制がなされていた。こうしたことが解禁になったのは戦後になってからである。

Q 学生時代の思い出としてはどうですか

A 私の学生時代は、授業料を払うが授業がなく、軍需工場へ勤労作業のため毎日工場の寮から通った。先生たちは、その監督者として工場へ来ていた。

戦争が終わって昭和20年（1945年）の10月

下旬に入って授業が再開されたが、木造の校舎は戦災で焼失、焼け残った鉄筋コンクリートの校舎は当時の逋信局（今の電々と郵政とを併せたもので、逋信省の四国における出先機関）が使用して、約半数の学生は松前の東洋レーヨンを借りて授業をうけるという状態だった。

戦後、しばらくは、出版事情が悪く本がなかった。岩波文庫の新刊が出ると開店前から街の本屋に行列ができた。古本もまともに入らない。今と違い、本がほとんど唯一の知識の源泉だっただけに学生たちは本に飢えていた。

私の学生時代の本学は、学生数は現在とは比べ物にならないくらい少なかったが、全国から学生が集まってきており入学後いろいろな方言での会話にある意味で異文化交流ができた。時代は暗く、食料も乏しく、空襲に逃げ惑う日々だったが、その頃の友達とは今でも交流がある。その点では、現在の本学は75%県内出身者で私の時代のように他県出身者との交流は少ないと思う。大学としては、全国から学生が集まる努力をして学生に友情の輪を広げてもらいたいと考えている。

Q 当時の図書館の蔵書はどうか

A 創立が高等商業学校だったので、経済関係、法律関係が多かったと思う。

戦争で講堂の屋根に焼夷弾が落ちて天井に大きな穴が開いたが、1階の図書館には届かず本は被害がなかった。昭和24年（1949年）の大学への昇格のためには本が焼けてなかったのは大いに助かった。

Q 学長の学生時代と教育職員としての図書館の利用の仕方は変わりましたか

A 学生時代と教員とではシステムがちがう。学生

のときは貸出冊数に制限があり、カードで検索しての利用だった。教員になって、教員研究費で必要な図書購入するなど利用の仕方が変わった。昔は教員が留学で外国に行くと図書や資料を集めることも目的の1つであり、戦前イギリスに留学した先生でタイプライターで多くの本を丸写しにして持ち帰った方もいた。山下文庫の中にある。

Q 学習のための図書館の利用方法について

A 学生の勉強の場所としての図書館の利用があるが、本学では総合研究所の資料も利用できる。今の学生は苦勞して資料を探すなどしないようだが、インターネットでの検索や大学間相互貸借によって資料を入手できるなど環境が変わっていて図書館の利用方法にも変化が生じている。

Q 図書館の未来像としては

A 図書や資料についての概念が変わってきている。本の形（紙）だけではなく、マイクロフィルムやマイクロフィッシュでの保存、CD-ROMやDVDなどの資料、雑誌についてもインターネットで検索、必要なものを収集できるなど、図書館の業務が旧来の図書や資料のみの収集ではなくなって来ている。そういう点では、図書館のあり方も変化してくると思われる。図書館という名称自体も変わってよいのではなかろうか。

図書や資料等情報の多様化に対応して図書館のサービス・システムを変えていくことが必要であろうと思う。

インタビューを終えて

坂本 祐子
法学部法学科 4年生

学長へのインタビューを終えて、本学の図書館は小さな図書室から始まり、戦争も乗り越え、段々と規模が大きくなり今に至ることを初めて知りました。また、戦時中は本そのものがなく読みたくても読めないという状況だったようです。今と比べると、考えられないような状況です。現在では本は、過剰なほどたくさん身の周りに存在しているにもかかわらず、かえって本を読まないことによる、現代人の活字離れが叫ばれています。こういう環境で育ってきた私が今回の学長の話を聞くことで、改めて本の大切さを知ることが出来ました。

また、図書館の電子化が進む中、本学の古い創立当時からあるような古い図書も閉架にはたくさん残っています。電子化が進んで図書館の環境が良くなっていくことは素晴らしいことですが、本学の歴史を刻んだとも言える古い図書も大切に保存し、共存していける図書館になっていって欲しいと思います。そのような図書館を後輩たちがより一層利用してくれることを望みます。

藤井 恵
経営学部経営学科 4年

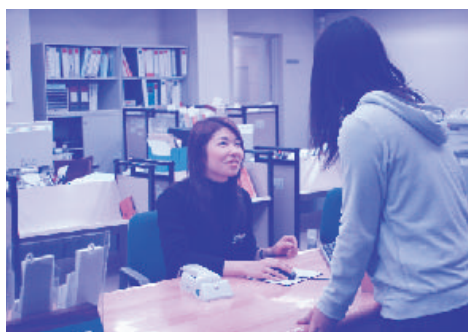
私の知っている現在の図書館と学長から聞く図書館は全く違うものでした。私の知っている図書館とは、本棚に沢山の資料（本）が並んでいて、それらを自由に閲覧できる場所です。図書館に入っても本が見当たらず、あるのは机と椅子と索引カードだけというのは想像できません。

当時の図書館は、資料（本）を提供することよりも、資料（本）を保存することが重視されていたように感じました。

資料（本）の検索にも現在よりずっと時間がかかっていたようです。現在のパソコンで資料（本）を検索することしか知らなかった私には、索引カードを1枚ずつ見て、読みたい資料（本）を探すということは考えられないことでした。私は学長の時代の図書館は簡単に利用できる場所ではないと感じました。

現在の図書館にも多くの課題があります。しかし、自由に読みたい本を探して読むことができる（利用できる）こと、私たちが普通だと思っていることが出来なかった時代があったことを知りました。

図書館今昔ピックアップ



現在の図書館内風景



1923（大正12）年3月受入図書（和書）



1923（大正12）年7月受入（洋書）



現在の図書館内風景



1949（昭和24）年1月受入図書（洋書）



1949（大正24）年1月受入（和書）

『私の図書館利用法』

人文学部社会学科4年 関 尚子

図書館には、1年生の時から非常にお世話になっている。1・2年生の時は話題の本や雑誌をチェックするのに、3年生から4年生になる現在では主に勉強場所として利用させていただいている。本ばかりでなく、新聞や雑誌の種類も多くて、家では手に入らない情報も、図書館に来れば手軽に入手できる。

図書館利用の一番は、情報を比較することができることである。特に、新聞各紙を比較するには素晴らしい環境ではないだろうか。普段新聞を読まない学生も多いと聞かすが、図書館でなら、各新聞の主張を読んで比較することもできるし、情報の伝え方が異なることも分かってくるので、ぜひ図書館で新聞を読んでみることを薦めたい。私自身、勉強に明け暮れていた頃は、毎日図書館に通って、その日の新聞に目を通していた。そうすることで、ある新聞では掲載されていなかったり、扱いが小さい情報でも、他の新聞では掲載されていたり、より詳しく書かれていることが多くて役に立った。就職試験や大学の定期試験でも役に立つ場合も多いので、おすすめである。

また、図書館は勉強する環境が整っている場所である。勉強する時に一番のお気に入りだった場所は、2階の個人スペースである。1人分のスペースが区切られているので、他の人の視線を気にせずに勉強に集中できる。資格試験などの勉強の際には、強い味方となるだろう。他の階も夜8時以降は比較的すいているので、集中して勉強したい人には夜がおすすめである。気分転換に1階の雑誌を読んだり、興味がある分野の本を持ってきて読むこともできる。

図書館の利用方法で意外と知られていないのが、文献複写である。館内のパソコンでWeb MAGAZINE PLUSに登録されている論文を検索し、学外の文献の複写依頼を図書館でお願いすることができる。卒業論文を書く時には、情報を集めるための強い

味方となる。卒業論文のテーマについて書かれた本や論文がない！という時にはぜひ利用してみてはどうだろうか。卒業論文関係では、1ヶ月貸出や書庫入室も可能なので、カウンターで相談してみてもどうだろうか。

私のお気に入りの場所の1つに、4階の資格図書コーナーがある。コンピュータ関係の資格から、弁護士や公務員、簿記や会計など数多くの種類の資格図書が置いてあり、わざわざ自分で本を購入しなくても必要な本が揃ってしまう。つい最近も、MOUS試験の対策本を借り、その本で勉強しただけで試験に合格した。本を手にとって比較したり、自分にとって分かりやすいかを判断した上で、無料で借りることができる図書館は非常にありがたい場所である。現在は資格試験の勉強をする予定がないという人も、ぶらっと立ち寄ってパラパラと本を読んでみるだけで、興味のある勉強分野に出会うかもしれない。

図書館に行くかどうかを友人と話すと、返事はおおまかに分けて2つに分かれる。足繁く図書館に通って本を読み、勉強をする人と、全く図書館には行かないという人である。前者の人はそれだけ図書館を賢く利用しているのではあるが、後者の人はもったいないことをしているように感じる。読書が好きではない、通うのがめんどくさいというのが理由だそうだ。図書館の雰囲気は苦手、という人のために薦める図書館の利用法は、オーディオスペースでのビデオやDVDの鑑賞である。図書館に置いているものは、本ばかりではない。まずは、図書館にあるDVDを見ることからはじめ、関心が向けば興味のある本から手に取ってみるのもいいだろう。私も、資格試験のビデオを図書館で見せてもらうなど、オーディオスペースにもお世話になっている。これが正しいという利用法はないのだ。

私が薦めるこの一冊

経済学部講師 吉田 健三



エコノミストは 信用できるか

東谷暁著

請求記号：081/B 6/348

配架場所：開架(2階)

経済学部で身につけるべき重要な能力の一つは、経済学者に惑わされないようにすることだ。やや皮肉な言い回しだが、これは経済学部スタッフとしての私の大真面目な考えである。経済の動きが、それぞれの人の生活や人生をより直接的に左右するようになった今日、TVなどのメディアでも経済学者やエコノミストたちの言説が毎日のように飛び交わされている。これらの言説は、もちろん一面では発言者の実体験や現実に対する丹念な分析に基づく意見である場合も多く、一概に軽視されるべきものではない。しかし、他方では世間に流通する経済の言説の多くが、発言者の個人的信念や信仰（思い込み）、さらにはその時々の流行に沿って発信されている面があることを、大学生ならば知っておくべきだと私は考える。

本書は、こうした昨今の経済論の一側面を手軽につかむ上で非常に便利な一冊である。著者の東谷暁は、この本以前に『誰が日本経済を救えるのか！』（日本実業出版社）で、すでに経済論争の流行の推移や言説の動揺を、キーワードの新聞記事の検案件数などを用いて明らかにした。本書は、この経済学に対する冷ややかな評価の姿勢をさらに推し進め、竹中平蔵や伊藤元重、中谷巖など著名エコノミストたちの格付けにまで踏み込んでいく。これらの格付けはもちろん、他の格付け一般と同様に著者の主観の織り交じったものではある。しかし、「市場」による評価の重要性を唱える経済学者達が、自らの言説に限っては外部から評定される機会が乏しかったことを踏まえれば、この試みは先駆的であり、私も経済学者の端くれとして

自爆する覚悟でいえば「痛快」でさえある。

もちろん本書の面白さは、単に経済学者の権威を剥ぎ、その言説を嘲笑することあるわけではない。結論がそれだけならば、最初からエコノミストの言うことには耳を塞ぎ、経済学など始めから学ばなければ良い、ということになってしまう。しかし、冒頭でも述べたように、経済の動きはやはり人の生活を大きく左右し、これに対する政策的論争であるエコノミスト達の言説もまた、私達の生活にとって大きな意味を持っている。それゆえ、少なくともその時々語られている経済政策や論点が何であるかに興味を持ち、その独特の言語体系で語られる世界を、「高尚な宇宙語」として敬遠するのではなく、向き合って理解する姿勢や素養もまた大学で身につけるべき能力だ、というのも私の考えである。

こうした課題に対しても、本書は非常によい材料を提供している。この本では、経済学者たちの言説の矛盾や変遷を突きながら、1990年代の経済政策は何が論点となっていたのか、事実はどうのように変遷してきたのか、あるいはどうすべきか、という論点を追及する姿勢を崩してはいない。その中で、「財政出動」「景気対策」「IT革命」「不良債権処理」「構造改革」「インフレ調整」などの昨今の経済政策の重要なキーワードの意味や内容、さらに相互関係やそれをめぐる論争が、手際よくかつ興味深く紹介されている。本書自体が、1990年代の経済政策を学ぶ一つの便利なテキストであるといっても過言ではない。

一般に、偉人の伝記やルポは、その人に心酔する人のものよりは、その人を偉いと思っていない人の作品のほうが客観性と奥行きがあって面白い。経済学者を偉いと思っていない人による経済学のテキストは、それと同様の面白さがあるように思われる。というわけで、本書は経済学部生はもちろん、他学部の学生にもぜひオススメしたい一冊である。



税法のぷらっとホーム (増補改訂版)

野口 浩著

請求記号：345.3/No

配架場所：開架

税法は、一般人にとって一番身近でありながら難しく縁遠い法律といっても過言ではない。主婦・大学生・フリーターであってもアルバイトで月額8万7千円以上稼いでいれば、税金を知らないうちに納めているのである。つまり、所得税法により源泉徴収されることとなる。しかしながら、通常、大学生の年間アルバイト収入が138万1千円未満（138万999円以下）であれば、源泉徴収された所得税は全額還付されるのであるが、国（実務的には税務署）は自発的に還してくれるほど親切ではない。納税者自身が還付請求をしない限り、戻ってくることはないのである。これで、実際上多くの人が損していると思われる。

そこで、一般庶民の目線から税法をわかりやすく身近な法律と実感させてくれるのが、本書である。初版本は2001年に出版されたが、その後の反響により消費税の項目が追加されて、2004年に増補改訂版が発行されるに至った。本書は、所得税・法人税・消費税の項目別に、それぞれ細分化された具体的なテーマについてコンパクトに解説がなされている。たとえば、所得税に関しては、「税率の変わり目を越える時は、働かないほうが得なのか?」、「預金利子には、実は20%の税金がかかっている」、「源泉徴収制度は悪い制度か?」、「高すぎる日本の課税最低限」など所得税の基本概念から確定申告まで興味深いトピックスがピックアップ・アップされている。さらに、具体的な裁判事例について、現行の税制度に対する司法の考え方をわかりやすい言葉で噛み砕いて教えてもらえる。

また、かつて著者自身が大学生時代アルバイトしていた話では、当時、相当稼いでいたために扶養控除（現在は収入が103万円を超えた場合）が受けられなかったと親から電話がかかってきて、このツケは大学留年として払う破目になってしまったという落ちも語っている（「扶養控除できない??? おまえ、ちゃんと学校行ってんのか?」参照）。本書の構成については、本文内容を補強するために条文の根拠を「税法check!!」として示しているのは勿論のこと、コラムとして「暴力団に支払った金は損金として認められるか?」、「税理士試験と実務との違い」などの読み物もあり、巻末には参考文献およびそれに対しコメントが付されるなど著者の熱いメッセージが窺える。

このように、本書は、「楽しく知って 賢く活かす 所得税・法人税・消費税の基礎知識」というサブタイトルどおり、硬い内容を軟らかい文章でおもしろく表現されている。法人税・消費税に関しては、実際に会社会計や商売に携わっていない人でも、一般教養として社会生活との関わりを学ぶことになるであろう。

最後に、著者は、イケメンの現役税理士であり、学習院大学非常勤講師として教育活動にも携わるなど多方面で活躍している魅力あふれる私の友人である（ブックカバーの写真参照）。

「第4回松山大学図書館書評賞」受賞者の発表

第4回松山大学図書館書評賞には102編の応募があり、図書館運営委員会で審査した結果、下記の通り受賞者が決定しましたので発表します。

○最優秀書評賞 1名

人文学部社会学科3年 ^{しおた}塩田 ^{あきと}明人 (2)
 『戦場カメラマンが書いたイラクの中心で、バカとさげぶ』
 (^{はしだ}橋田 ^{しんすけ}信介著、アスコム)

○優秀書評賞 2名

法学部法学科3年 ^{やました}山下さやか (初)
 『ビタミンF』
 (^{しげまつ}重松 ^{きよし}清著、新潮社)

法学部法学科3年 ^{やまだ}山田みゆき (初)
 『リトルターン』
 (ブルック・ニューマン作、^{いつき}五木 ^{ひろゆき}寛之訳、集英社)

○佳作 2名

人文学部社会学科3年 ^{わたなべ}渡邊 ^{くみ}久美 (初)
 『13階段』
 (^{たかの}高野 ^{かずあき}和明著、講談社)

人文学部社会学科4年 ^{なかや}中矢 ^{たかひさ}貴久 (2)
 『ベストフレンド ベストカップル
 ～愛をもっと強くする心理学～』
 (ジョン・グレイ著、^{おおしま}大島 ^{なぎさ}渚訳、三笠書房)

注) かつこ内の数字は受賞回数です。

※作品については http://www.matsuyama-u.ac.jp/lib/syohyo/jyusyo_04/jyusyo_04.htm をご覧下さい。

「編集後記」

今回の館報は、現在の図書館しか知らない私たちが、昔の松山大学図書館はどうだったのだろう。現在では当たり前前のことも過去からすれば夢のような状況かも知れない。現在を踏まえて将来はどうだろう。「松山大学図書館今昔物語」は少々大げさですが、松山大学図書館の歴史を垣間見ることができればと企画しました。

「僕の夢は、大きくなってプロ野球選手になることです。3歳から週3日練習をして、5歳からは1年のうち360日練習をしているのでなれると思います。」これは、シアトルマリナーズのイチロー選手が12歳のときに「夢」という題で書いた作文の一部です。アメリカメジャーリーグでの活躍と結果を残していることでは、「夢」

を大きく開花させた人といえるでしょう。作文の最後に「それまでお世話になった人を球場に招待したい。」との一節は、12歳にして、自分の「夢」の実現には周りの人の支えがあること、そのことへの感謝を忘れてはいけないとの思いがあったのでしょうか。

松山大学図書館の未来について夢を語れば際限がないかも知れませんが、より良くしたいとの共通の「夢」に向かって、支えあっていることや感謝の気持ちを忘れないようにします。

松山大学図書館報 No.34 2005年1月31日発行

編集・発行 松山大学図書館

〒790-8578 松山市文京町4番地2 TEL(089)925-7111(代)

ホームページアドレス <http://www.matsuyama-u.ac.jp>

E-mail: mu-libs@matsuyama-u.jp